

青年期の自己受容に関する研究 — 両親および友人関係の与える効果について —

佐藤 明美

I 問題と目的

自己受容は、個人の行動の準拠枠となる自己概念の主要な次元であり、青年期という主体的自己形成を始める時期にあっては、とりわけ欠くことのできない過程であると考えられる。そこで、本研究では、青年がどのようにして自己の受容を獲得していくのかその過程をさぐり、またその過程にはどのような要因が関わり、さらに自己受容の差をもたらす要因がなんであるのかを明らかにする。

そのためには、まず従来さまざまに定義されてきている自己受容概念を整理し、操作的に定義しなおして数量化可能にすることが必要である。しかしこれまでの自己受容研究の現状では、定義や測定方法の点で必ずしも充分とはいえない尺度による研究が多い。そこで本研究では宮沢(1982)を参考にして、自己受容を新たに「自己客観視」「自己価値」「自己の独自性と自信」との3側面よりとらえ、研究Iとして、これら3側面よりなる青年期の自己受容を測定する信頼性と妥当性の高い尺度を作成することを目的とする。

また、自己受容の年齢的变化や性差についても、用いた尺度の相違があって、これまで一致した見解が得られておらず、比較も容易でない。そこで研究Iで作成された尺度を用いてこれらの検討を試みることを第2の目的とし、これは研究IIで行なう。

さらに研究IIでは、自己受容にかかわる要因として、青年をとりまく重要な他者である両親と友人を取り上げ、これらの関係を年齢別、性別にわけて分析し明らかにする。これが第3の目的である。その際、親子関係については、青年期は関係の再調整の時期であるとの見方から、最近の研究で注目されてきている家族における Individuation のモデルに従い、親子関係を Individuality と Connectedness の2次元でとらえることにする。Grotevant & Cooper (1982, 1985) は、青年の self-esteem や Identity の発達に、Connectedness と Individuality で表される関係の質によって促進されることを検証してきており、本研究は彼らの研究に大きく依っている。また、親子関係は青年の自己の発達だけでなく、友人関係にも影響を与えることが知られており、友人関係がまた青年の自己の発達を促すことも

多くの研究によって見いだされてきている。そこで、本研究では、親子関係が自己受容に直接効果を及ぼすとともに、友人関係へも影響することを通して、間接的にも自己受容を促進する要因として働くものとして考え、この因果モデルにしたがって分析を進める。また年齢、性別、自己受容の3側面それぞれによる、関連のあり方の相違にも着目して分析を進める。

II 研究I

自己受容測定尺度を作成するため、まず上述した3側面に相当する質問項目を従来の自己概念に関する研究より30項目を選び、これを5大学の大学生617(男子282, 女子335)名を対象に調査を行なった。因子分析の結果は、自己客観視に相当する項目が2因子に別れて抽出されたものの、項目の削除等の操作によって最終的には、自己受容の3側面に対応する因子構造を見いだすことができた。項目数は各下位概念とも6項目であり合計18項目からなる尺度となり、内的一貫性による信頼性の推定において充分信頼のおける尺度が作成された。また妥当性の検討のため、MAS不安尺度と Hopkins Symptom Checklist より抽出した「心身症傾向尺度」、「うつ傾向尺度」との相関係数を求めたところ、自己受容のいずれの側面においても有意な相関関係にあることが認められた。これによって、本自己受容尺度が、精神的健康やパーソナリティと密接に関連する青年の自己受容をとらえた尺度として、充分妥当性のあるものであることが確認された。

III 研究II

研究IIでは、中学生140(男子67, 女子73)名と大学生179(男子75, 女子104)名を対象として、研究Iで作成された自己受容尺度と、大学生男女各100名を対象とした予備調査を経て作成された親子関係の Connectedness と Individuality を測定する尺度、および内面的結合とともに異質性を認め合う友人関係への Commitment を測定する尺度の3種から構成された質問紙調査を実施した。そして各尺度の因子分析の結果により、中学生・大学生ともに、解釈可能性から自己受容は上述の3因子から、親子関係は“親子双方の Connectedness”、“親から子どもに対する Individuality”“子どもから親への Individuality”(この場合父親と母親は込みになっ

ている)の3因子から、また友人関係については1因子よりなるものとしてとらえることにした。

以上の結果にもとづき、まず第2の目的について、中学生と大学生との結果を尺度得点の変化と因子構造の点から自己受容の年齢的变化と性差の検討を行った。その結果、大学生は中学生より自己を受容しており、とくに自己の独自性の側面においてはこれが顕著であることが認められた。またこの独自の存在としての自己への意識(自己の独自性と自信)は、中学生では未だ他の自己受容の側面から分化してきておらず、大学生になって顕著な側面として構成されてくることが明らかとなった。また、これらの年齢的变化については男女でもその傾向が異なっていた。自己受容の年齢的変容の問題に対して結論を下すことはできないが、自己の独自性と自信については、中学生より大学生において、分化とともに量的にも増大するという本結果は、青年期の課題としてのアイデンティティの確立に通じるところがあり興味深い結果と思われる。

また、性差については、中学生では、男子の方が女子より自己を受容的にとらえているが、大学では女子の方が受容的であるという結果が得られた。従来の結果では一般に青年期では男子の方が女子より自己を肯定的にとらえることが言われている。上述した年齢的変容でも男女では異なる結果が得られており、これらのことから自己の受容の過程そのものが、男女では異なっていることが予想される。年齢差、性差については、今後、高校生のデータも取り入れ、縦断的な調査によってさらに明らかにされる必要がある。

次に第3の目的については、親子関係の3因子を第1、友人関係を第2、自己受容尺度全体とその3側面を第3水準としてパス解析を行なった。その結果、親子関係の Connectedness と Individuality は自己受容に影響し、また友人関係にも影響する要因であることが見いだされ、さらにこの友人関係が自己受容を促す要因として働いていることが認められた。しかしまた年齢、男女別によってこれらの影響のパターンが異なっていることが認められた。すなわち、親子の関係の Connect-

edness は大学生より中学生、男子より女子において有力な要因となっており、Individuality は中学より大学、女子より男子において自己受容にとって影響が大きいことが認められた。これらのことから、自己受容はまず親子相互の共感性や暖かさといった安心感のある結びつきをベースとして獲得されてくるが、年齢の上昇とともに、親からの分離・自律性が増し、Individuality の次元での親との関わりが増大するという関係の変化の中でさらに促されていくものと考えられる。また、この傾向は男子において顕著であって、男子にとっては親との Individuation の獲得が自己の受容にとって重要であり、これに対して女子では、従来から女子は人との関係の中で自己を確立すると言われている通り、親や友人との connected な関係の中で自己を受容していくものと考えられる。さらに分析の結果、自己受容の側面によっても関わる要因の比重が異なることが認められた。自己価値では中学大学共通に親子の Connectedness による要因が最も強く、自己の独自性では友人関係による影響が最も大きいことが見いだされた。

これらのことから、自己受容を3側面から捉えていくことの意義と、青年の自己の発達を青年をとりまく関係の文脈で捉えていくことの有用性が支持された。今後さらに、父親と母親での役割の相違、Connectedness と Individuality のバランスに焦点をあてた検討が必要である。

引用文献

- Grotevant, H. D. and Cooper C. R. 1983 The role of family communication patterns in adolescent identity and role taking. *Meet. Soc. Res. Child Development.*
- Grotevant, H. D. and Cooper C. R. 1985 Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Develop.* 56 : 415-428.
- 宮沢秀次 1982 青年期における自己受容性測定スケールの検討 市邨学園大学・短期大学人文科学研究会 人文科学論集 32, 113-139.